

4 出土した主な遺物



縄文土器 (深鉢)



須恵器 (坏身・坏蓋・盤)



土師器 (坏)



土師器 (甕・鉢・脚付盃・甑・碗)

5 調査の成果

今回の発掘調査によって、調査区の中央部に、円形で中央に石囲炉をもつ縄文時代後期（3,500～4,000年前）の竪穴建物跡を確認しました。その周辺には、黒色土の遺物包含層があり、出土土器から竪穴建物跡と同時期に堆積したことがわかりました。

古墳時代では、円墳1基を確認しました。周溝が6世紀後半には埋まっていたことから、古墳が築造されたのは5世紀から6世紀前半と想定されます。また、7世紀中頃の竪穴建物跡からは、東海地方から搬入されたと考えられる須恵器の坏身や、在地の須恵器の盤や坏蓋が出土しました。当時、この地に有力者が存在していたと考えられます。

第1～3次発掘調査では、古墳時代から平安時代の竪穴建物跡が多数確認されています。今回の調査区でも古墳時代から平安時代の竪穴建物跡が確認できたことから、中央部の空白部をはさんで、集落が西側にも存在していたことがわかりました。

第1～4次発掘調査によって、当遺跡は縄文時代から江戸時代までの長きにわたって土地利用が続いていたことがわかりました。

平成28年7月9日（土） 発掘調査遺跡現地説明会資料

一般国道293号常陸太田東バイパス整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

瑞龍遺跡 (ずいりゅういせき)

所在地：常陸太田市瑞龍町629番地ほか

調査面積：1,857㎡

委託者：茨城県常陸太田工事事務所

調査機関：公益財団法人茨城県教育財団 常陸太田事務所

TEL 029-225-6587 <http://www.ibaraki-maibun.org>

1 遺跡の位置と調査の目的

瑞龍遺跡は常陸太田市の南東部に位置し、里川右岸の標高約42mの台地上に立地しています。当遺跡の北には瑞龍古墳群や瑞龍A・B横穴墓群、南には白鷺古墳群や白鷺横穴墓群などが所在しています。瑞龍古墳群からは古墳時代前期の方形周溝墓14基や古墳2基、ヘラ状の器物を持つ女子像埴輪、石棺から10本の鉄鏃などが出土しています。

当遺跡の調査は、茨城県常陸太田工事事務所から委託を受け、一般国道293号常陸太田東バイパス整備事業に伴い、実施してきました。平成25～27年度の第1～3次発掘調査に続き、今回の第4次調査は平成28年4～7月の4ヵ月間の予定で実施しています。今年度の調査面積は、1,857㎡です。



瑞龍遺跡位置図

2 調査の概要

当遺跡は東西約500m、南北約1,500mの範囲で、今回の調査区域は遺跡の南東部に当たります。第1～3次調査で、竪穴建物跡124棟（縄文2、弥生3、古墳66、奈良17、平安53、時期不明6）、掘立柱建物跡17棟（平安16、室町1）、溝跡13条、道路跡1条、土坑540基などを確認しました。

今回の調査では、竪穴建物跡23棟（縄文1、古墳8、奈良2、平安8、時期不明4）、円墳1基、溝跡11条、道路跡1条、土坑112基などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（浅鉢・深鉢）、土師器（坏・高台付坏・小皿・高台付皿・甕・器台・高坏・甑・脚付盃）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・甕・甑・瓶）、石器・石製品（鎌・敲石・打製石斧・磨製石斧）、土製品（土錘）、鉄製品（鎌・釘）、銭貨などです。



竪穴建物跡を掘り込んでいる様子

3 確認した主な遺構



【第 125 号竪穴建物跡】

縄文時代後期の建物跡です。建物の中央部に「炉跡（現在のガスコンロの役割）」が見つかりました。炉を囲むように石が付設されています。火を受けた部分は赤く焼けていました。



【第 115 号竪穴建物跡】

奈良時代の建物跡です。竈が北壁及び東壁の2箇所で見つかりました。竈は最初、北壁に付設され、その後、東壁に移設されたことがわかりました。



【第 131 号竪穴建物跡】

奈良時代末から平安時代初めの建物跡で、黒色土帯を掘り込んで建てられていました。北壁に付設された竈は白色粘土で袖部を構築してありました。



【第 133 号竪穴建物跡】

平安時代の建物跡です。竈の内部から土器が集中して出土しました。建物内に柱穴が確認できず、壁外に柱穴6か所が確認できました。



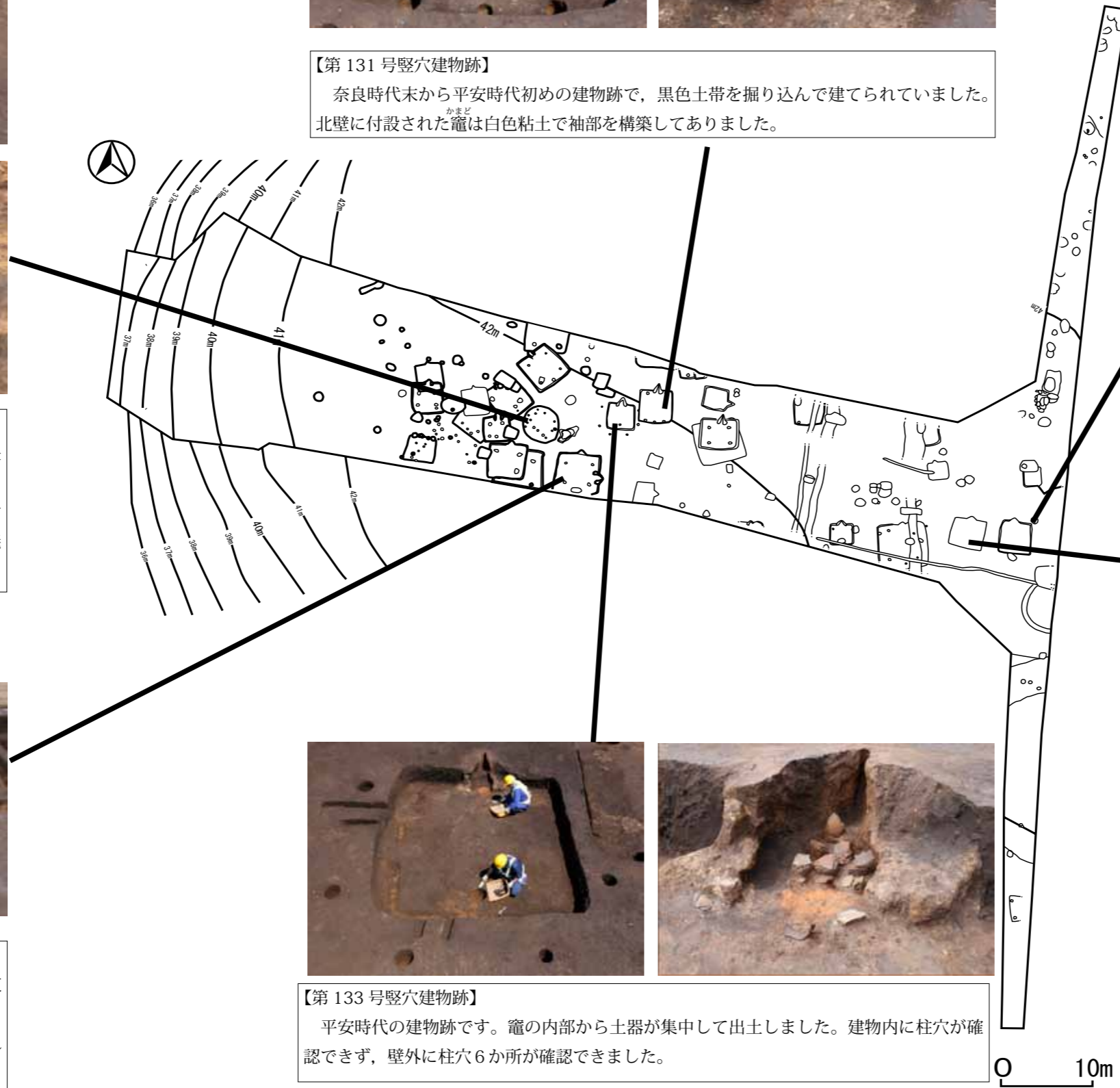
【第 656 号土坑】

縄文時代後期の土坑の覆土中層からは、ほぼ完形の縄文土器が出土しました。



【第 142 号竪穴建物跡】

古墳時代後期の建物跡の竈右側から、東海地方から搬入されたと考えられる須恵器の坏が出土しました。



【調査 3・4 区 古墳周溝完掘状況】

白線が周溝として推定される部分。規模は、直径約 22 m ほどです。